

深野康彦の 先取り経済NEWS!!

編集・発行 株式会社 アサヒ・ビジネスセンター 2018年4月10日

今月のトピックス 「経済指標に一喜一憂する局面は継続模様」

2 ヶ月前のこのコラムで、株価は景気に先行して動くと言いました。概ね半年～1年程度の先行というイメージなので、2月に株価が急落したということは、経済指標等に現われるのは夏以降とと思っていましたが、早くも経済指標に現われ始めています。4月2日、2018年度に入って初めて公表された経済指標、3月調査の日銀短観が悪化したのです。日銀短観は、日本銀行が企業経営者に直接アンケート調査を行うもので、日本経済の手がかりを知る指標として国内外の市場関係者が注目しています。

その日銀短観、これまで経済を牽引して来た大企業製造業の業況判断DIが前回調査比2ポイント悪化したのです。たかが2ポイントと思われるかもしれませんが、悪化したのは2016年3月以来2年ぶりです。調査したのは3月、言い換えれば円高・株安が進んでいた局面なので、企業経営者のマインドもやや冷え込んでいた点は割り引く必要があるでしょう。ただ、日銀短観では足下の景気その他、景気の先行きも調査しています。その先行きの見通しは前回調査比4ポイントも悪化しているのは気になることです。

日銀短観は四半期毎に公表されますが、次回は6月調査で7月2日に公表予定です。仮に7月の日銀短観も悪化していたら、景気に暗雲が立ちこめ始めたと言えるかもしれません。同調査は中堅企業、中小企業も調査しているのですが、中堅企業の業況判断DI（全産業）は前回調査比1ポイント悪化（中小企業は変わらず）と大企業製造業より小幅ですが、先行きの見通しは前回調査比5ポイントも悪化（中小企業は3ポイント悪化）していることも付け加えておきましょう。

日銀短観は四半期毎の調査ですが、毎月、かつ私たちの生活に密着している経済指標に「景気ウォッチャー調査」があります。同調査は地域の景気に関連の深い動きを観察できる立場にある人々の協力を得て、地域ごとの景気動向を的確かつ迅速に把握し、景気動向判断の基礎資料とすることを目的としています。スーパーやコンビニエンスストアの店長、レストラン経営者、タクシー運転手、ホテル経営者、テーマパーク職員等々に調査を行っているため、別名「街角景気」などと言われることがあるほど、消費者に密着しているのです。その景気ウォッチャー調査、実は景気の現状判断DIは2018年2月まで3ヵ月連続悪化、先行き判断DIは同4ヵ月連続悪化しているのです。共に季節調整値なので、今冬の悪天候による統計データの悪化は調整されているのです。

たまたま悪い経済指標を取り上げたに過ぎないのでは？と思われる面もあるでしょう。確かに良い経済指標もあるのは事実ですが、足下やや悪化している経済指標が目立ち始めたのが気になるのです。景気は好調だから株安は一過性と度々言われますが、その好調と言われる景気が実はまだら模様とあっては、株価が本格的に出直るには時間がかかると考えられます。あるいは経済指標にさらに悪い指標が増えてくれば、株価が1月の2万4129円の高値を奪還するには相当時間を要すると思います。経済指標に一喜一憂する局面が当面続くのではないのでしょうか。